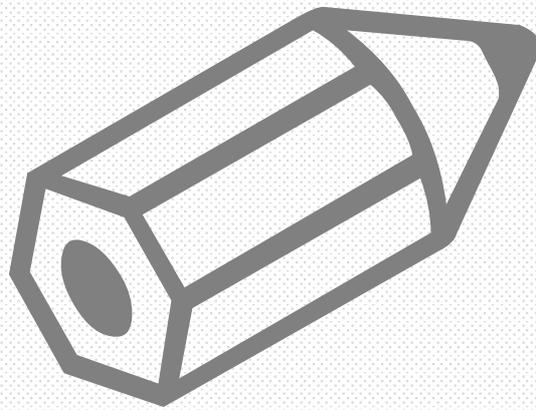


マララ・ユスフザイ

教育のために声をあげた少女の物語



“One child, one teacher, one book, and one pen can change the world.”

2013年7月12日、1人の少女が国連で教育の重要性について世界に訴えました。タリバンの恐怖にも負けず、声をあげて闘い続ける彼女。その活動に対して、2014年、ノーベル平和賞が授与されました。マララ・ユスフザイさんの生き立ちを、その著作『わたしはマララー教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女』(学研パブリッシング)や新聞、ウェブの情報などをもとに、物語風にまとめてみました。

自由で平等な教育を求めて

「どの子がマララだ？」1人の男が声をあげた。答える者はいない。男はピストルを構え、少女に向かって発砲した。下校途中のスクールバスの中で、少女は銃弾によって倒れた。しかし、その男が引いたものはピストルの引き金だけではなかった。それは、マララ・ユスフザイという少女の声をテロリズムの恐怖と戦い、自由と教育を求める何万人もの少女や子どもたちの叫びを、世界中に届ける引き金でもあったのだ。

○スワート渓谷

1997年7月12日、パキスタンの北西部に位置するスワート渓谷でマララは生まれた。美しい景色ときれいな空気の、東のスイスと呼ばれる地域だ。スワートはもともと仏教徒の地域だったが、11世紀頃にイスラム教がもたらされ、そこに住むパシュトゥン人に広まった。マララはそこで、貧しくはあったものの、両親と、2人の弟とともに仲良く暮らしていた。パシュトゥン人は誇り高い民族であり、同時に伝統を重んじる民族でもあった。女性は男性に付き従う存在で、1人で自由に外を出歩くこともできなかった。女性は自分の父親や親族が決めた男性と結婚し、家の中で家事や育児をこなすのが通常だ。女子にすすんで教育を受けさせようとする家庭はほとんどなかった。しかし、マララの父親であるジアウディンは、知識ほど貴重なものはないという考えの持ち主だった。ジアウディンは、パキスタンの抱える多くの問題の根底にあるものは、人々が教育を受けられないことによる無知からくるものだと考えていた。そこで彼は市内に学校をつくり、子どもたちを集めた。最初はなかなか人数が集まらなかったが、次第にその規模は大きくなっていった。マララは、まだ話もできない頃から教室に出入りし、学校で育った。ジアウディンは、マララが女子であることを気にも留めず、様々なことを教え、自由に生きることを望んでいた。そうした父親の教えやスワートの豊かな自然のもとで、マララはとても活発で聡明な少女へと育っていった。

しかし2001年9月、彼女の世界は大きく変わる事となる。イスラム過激派のテロ組織・アルカイダによってニューヨークのワールドトレードセンターとペンタゴンが攻撃を受けた。これに対しアメリカはアフガニスタンへの空爆を開始。首謀者とされるウサマ・ビン・ラディンはパキスタンへ逃亡した。アメリカはパキスタン側へ協力を要請し、何十億ドルもの資金をパキスタンの諜報機関・ISIへ送った。しかし実際のところ、ISIはアルカイダを支持していたタリバン政権へその資金を援助していた。タリバンはもともとイスラム教に基づく治安維持、秩序回復を目的とした武装集団であり、その構成員の多くはパシュトゥン人であった。そのため、敬虔なイスラム教徒のなかには彼らを支持するものも多く、元来保守的な地域であったスワートでも、彼らは力を握りつつあったのである。そしてその4年後の2005年10月、パキスタンを大地震が襲った。犠牲者は7万3千人を超え、被害は甚大なものであった。そうした混乱の中、イスラム法強化運動・TNSMと呼ばれる組織がボランティ

ア活動を行っていた。その指揮をとっていたのはファズルラーという神学者であった。ファズルラーはその後パキスタンにおけるタリバンのリーダーとなり、2007年にラジオ放送を開始した。その内容は当初はイスラム教を解説するものであったが、だんだん過激になり、ダンスや歌、音楽を否定し、そういう罪深いことをしているから地震が起こったのだ、と説いた。マララたちは彼らの考えに否定的であったが、多くの人々はファズルラーを支持し、所有するテレビやDVD、CDを捨てた。なかには自分たちの財産を寄付するものもいた。タリバンはスワートにおいてさらに勢力を拡大し、しばらくすると女子に教育を与えることを禁ずると言い出し、ますます攻撃的になっていった。あらゆる娯楽は禁じられ、行動は制限され、彼らの教えに背くものは容赦なく殺された。そうした状況を目にした政府もついに傍観をやめ、スワートに政府軍を派遣した。紛争は本格化し、一般市民の多くも犠牲になった。最初はタリバンに協力的だった市民たちも、彼らのあまりの過激な活動に反抗的になっていったが、恐怖からその命令に従わざるを得なくなっていた。しかし、そうした恐怖にも負けず、マララは声をあげてこうした状況に疑問を投げかけた。テレビやラジオの取材を受け、女子の権利について訴えたのである。しかし無情にも、2008年の12月、タリバンは「全ての女子校を閉鎖する。1月15日以降、女子が学校に行くことを禁止する」という声明を発表した。この時マララは、学ぶということは未来をつくるということだと気づいた。“タリバンは私たちからペンや教科書を奪うことはできても、考える力を奪うことはできない。”—マララはマスコミのインタビューを受け続けた。マララは、声をあげて闘うことを選んだのである。

そうした暗い日々を送っていたなか、マララは、父親の友人であるアブドゥル・ハイ・カカルから、スワートの悲惨な暮らしを女子学生の目線で紹介してほしいとの依頼を受けた。ハイ・カカルが電話でインタビューをし、その会話をBBCウルドゥーのウェブサイトにも週1回のペースで投稿する。本名では危険なため、グル・マカイというペンネームを使い、タリバンへの恐怖や学校への思いを打ち明けた。学校からの帰り道のエピソードも話した。「『お前を殺してやる』という声は後ろから聞こえたので、早足で歩いた。しばらくしてから振り返ると、男が電話で話しているのが見えた。さっきの言葉は電話の相手に向けられたものだとわかり、ほっとした」—この日記は国内外で大きな反響を呼んだ。転載する新聞もあり、BBCでは音声でも紹介された。マララは自分たちのあげる声にどれほど力があるかを感じるようになった。

その後もマララは女子の権利について訴え続けた。そうした活動を続けていたある日、驚くべきニュースがマララのもとへ舞い込んだ。パキスタンで最初の国民平和賞が、マララに授与されることになったのだ。そして、2011年12月、首相官邸で授与式が行われた。国民平和賞はその後マララ賞と呼ぶこととなり、毎年18歳未満の子どもに与えられることが決定した。マララはもらった賞金の一部を、困っている人たちのために使うことにした。そしてスワートすべての女子が教育を受けられるようにすることを最優先課題とした協議会を設立した。その翌年、マララたち家族はテレビのゲストとしてカラチに招待された。マララはそこで、女子が教育を受ける権利のために、みんなで力を合わせて戦おうと呼びかけた。そんなある日、1人の女性ジャーナリストがマララのもとを訪れ、タリバンがマララを殺すという声明を出している、とマララたちに伝えた。それを聞いたジアウディンは、マララの身を案じ、しばらく活動を控えるようマララに言った。それに対しマララは、「そんなこと、できる

わけないわ。命より大切にしなきゃならないものがあるとわかったんだから。あとは声に出してそれを訴えるだけ。私たちが死んでも、その声はまわりに広がってくれる。そう言ったのはお父さんでしょう。活動をやめるなんて、できない！」と、言い切った。

○スクールバスでの惨劇

自分がパシトゥン人であるという誇りと勇気を持ってそう宣言したマララであったが、殺害予告が出された後は、用心深く行動するようになった。心のなかで不安を押し殺していた。夜には何度も神に祈るようになった。そして 2012 年 10 月 9 日。学校ではテストが行われていた。マララは 2 日目のテストを無事に終え、友人たちと帰りのスクールバスに乗り込んだ。スクールバスとは言っても、実際は白のトヨタのワンボックスカーだ。後ろにはドアも何もなく、生徒や先生たちは後ろからバスに乗り込む。車内には細長いベンチが縦に 3 つ並べられていて、マララはその左端のベンチに座った。バスには 20 人ほどが乗っており、これ以上人が乗れないほどにぎゅうぎゅう詰めだった。メインストリートをぬけ、少しすると、バスが急停車した。1 人の若者が道路に飛びだしてきて、運転手に尋ねた。「これはクシャル・スクールのバスか？」 2 人が話しているうちに、白い服を着たもう 1 人の男がバスの後ろから近づいてきた。男は伝統的なウールの帽子をかぶって、顔にはハンカチを巻いて鼻と口を隠していた。そして男は後ろからバスに飛び乗り、厳しい口調で言った。「どの子がマララだ？」 答える者はいなかったが、何人かがマララの方を見た。男は黒いピストルを構え、続けざまに三発撃った。一発目はマララを、残りの二発はそばにいた仲間を襲った。マララはその場に倒れ込んだ。

犯人たちは、発砲後すぐさまその場から逃走した。運転手は何が起こったのかに気づき、猛スピードでバスをスワート中央病院に向かわせた。スクールバスでの発砲事件は瞬く間に広まった。マララはその後、統合軍病院に運ばれたが、事態は深刻であった。銃弾が脳のすぐ近くを通っていたため、手術を行う必要があった。何時間にも及ぶ大手術の結果、手術は成功した。しかし、依然として予断を許さない状況に変わりはなく、次第に容体は悪化していった。マララが襲撃されたというニュースは、すでに全世界に広まっていた。世界中が激怒し、国連事務総長のパン・ギムンも、オバマ大統領もこの襲撃事件を非難した。マララはパキスタンで最高レベルの治療を受けられる国軍循環器学病院に搬送されていたが、海外のあらゆる病院がマララの治療を引き受けたいと申し出た。そこで、マララはイギリスのバーミンガムにあるクイーン・エリザベス病院に転院することとなった。そこでマララは再び手術を受けた。世界中の子どもたち、政治家、有名人からカードやメッセージ、プレゼントが届けられた。世界中が、マララの回復を祈っていた。そして手術は成功し、マララは順調に回復していった。リハビリの結果、マララは 2013 年 1 月の初めに退院することになり、バーミンガムで家族と一緒に暮らすことになった。マララの回復は奇跡的なもので、マララはアッラーに心から感謝した。そして、自分が助けられたことには理由があるのだと考えた。この第二の人生をかけて、みんなを助けるという使命があるのだと。マララは自分あてに届いた寄付金をもとに、マララ基金を創設した。そして、スワート在住の学校に通えな

い女子 40 人に対し、4 万 5 千ドルを提供した。

○国連でのスピーチからノーベル平和賞へ

そして、2013 年 7 月 12 日、16 歳の誕生日。マララはニューヨークの国連本部にいた。そこでマララは、世界中の人々に向けて、教育の大切さについてスピーチを行った。

私は今日、たくさんの少女のうちの 1 人として、ここに立っています。これは私の声ではありません。権利を求めて闘う、声をうばわれた人々の声なのです。平和に生きる権利、人間としての尊厳を認められる権利、均等な機会を得る権利、教育を受ける権利を、私たちは求めます。

親愛なる兄弟姉妹のみなさん、暗闇の中においてはじめて、私たちは光の大切さに気づきます。沈黙させられてはじめて、私たちは声の大切さを知るのです。それと同じように、自分たちの住むパキスタン北部のスイートが銃の町になってしまったとき、私たちは、ペンと本の大切さに気づきました。「ペンは剣より強し」ということわざがありますが、まさにその通りです。過激派は本とペンを恐れています。教育の持つ力が怖いのです。そして、彼らは女性を恐れています。女性の声を持つ力が怖いのです。

私たちの言葉には力があります。私たちの言葉で世界を変えることができるのです。しかし、私たちが自由で平等な教育を手に入れるためには、強くならなければなりません。知識という武器を、団結という盾を持ちましょう。

親愛なる兄弟姉妹のみなさん、忘れてはなりません。何百万もの人々が、貧困や不正、無知に苦しんでいます。何百万もの子どもたちが、学校に通えずにいます。私たちの兄弟姉妹が、明るく平和な未来を待ち望んでいるのです。

だからこそ、世界の無学や貧困、テロリズムに立ち向かいましょう。本とペンを手にとりましょう。この 2 つこそが、私たちにとってもっとも力のある武器なのです。1 人の子ども、1 人の教師、1 冊の本、そして 1 本のペンで、世界を変えることができるのです。(一部抜粋)

スピーチが終わると、スタンディングオベーションが沸き起こった。世界中からマララを支持するというメッセージが寄せられた。マララはその後も、数々の賞を受賞。そして 2014 年の 12 月、史上最年少でノーベル平和賞を受賞した。そしてまたその場で、発展途上国の子どもたちの教育環境の改善の進みが鈍いことを指摘し、以下のようなスピーチを行った。

この賞は、私だけのものではありません。教育を求めながらも忘れ去られた子どもたち、平和を望む

おびえた子どもたち，変革を求める声なき子供たちのためのものです。私は彼らの権利のため，彼らの声を届けるためにここに立っているのです。今は彼らを哀れむときではありません。教育を奪われた子どもをもうこれ以上目にしないように，行動を起こすときなのです。

私たちは教育を渴望していました。なぜなら，私たちの未来はまさに教室の中にあつたのですから。私たちは仲間とともに座り，本を読み，学びました。大好きなきれいな制服を着て，大きな夢を抱きながら教室に座っていました。私たちは，両親に自分たちのことを誇りに思っほしかつたのです。優れた成績をあげ，何かを成し遂げるといった，一部の人からは男子にしかできないと思われていることを，女子でもできるのだと証明したかつたのです。

しかし，こうした日々は長くは続きませんでした。私が 10 歳のとき，美しい観光地であつたスワートは，突如としてテロリズムの地と化したのです。400 以上もの学校が破壊され，女子たちは学校に通うことを禁じられました。罪のない人々が殺され，夢は悪夢へと変わったのです。教育は権利から犯罪になりました。しかし，私をとりまく世界が急変したとき，私が優先すべきことも変わったのです。私には 2 つの選択肢がありました。沈黙したまま殺されるのを待つか，声をあげて殺されるか。私は後者を選びました。声をあげようと決めたのです。

私が心から望んでいることは，子どもたちの教育のために闘わなければならないのが，これで最後になつてほしい，ということです。私たちはすでに，正しい方向に歩みを進めています。今こそ躍進するときなのです。

いわゆる大人の世界であれば理解されているのかもしれませんが，私たち子どもにはわかりません。なぜ「強い」といわれる国々は，戦争を起こすうえでは非常に力強いのに，平和をもたらすことにかけてはあまりに弱いのでしょうか。なぜ，銃を与えることはたやすいのに，本を与えることはそれほど難しいのでしょうか。なぜ，戦車をつくることは簡単なのに，学校を建てることはそれほど難しいのでしょうか。

親愛なる兄弟姉妹のみなさん，すべての人に平等と正義を，そして平和をもたらすためには，政治家や世界の指導者だけに頼るべきではありません。私たち全員が，貢献する必要があります。私も，あなたたちも。それが私たちの義務なのです。私たちは動くべきです。待ってはいけません。動くべきなのです。私は，私の仲間である子どもたちみんなが，世界中で立ち上がることを求めます。

親愛なる兄弟姉妹のみなさん，教育のために闘うことを終わりにしようと決めた最初の世代になりましょう。

空っぽの教室も，失われた子ども時代も，生かされなかつた可能性も。

男子や女子が子ども時代を工場で過ごすのも，もうこれで終わりにしましょう。

女子が幼いうちに強制的に結婚させられることも，純真な子どもが戦争で命を落とすことも，教室が空っぽのままであり続けることも，これで終わりにしましょう。

女子が教育を受けることは権利ではなく犯罪だと言われるのも、もうこれで終わりにしましょう。

子どもたちが学校に通えずにいる日々も、これで終わりにしましょう。

この「終わり」を始めましょう。私たちが終わらせましょう。今、ここから、より良い未来を築いていきましょう。(一部抜粋)

マララは今も、虐げられている少女たちに代わって、すべての子どもに平等に教育の機会が与えられるよう声をあげている。誰もが笑顔で平和に暮らせる世界をつくるため、活動を続けている。彼女の名前は、マララ・ユスフザイ。彼女を取り巻く世界が変わっても、その願いは変わらないはまだ。

マララ・ユスフザイ—教育のために声をあげた少女の物語—

平成 27 年 3 月 30 日発行

〈非売品〉

編著者 開隆堂編集部

発行者 開隆堂出版株式会社

〒113-8608 東京都文京区向丘 1-13-1

電話 03(5684)6115(編集), 6121(営業)
